

スポーツと左利きの関係～大学生を事例として～

A study on relationship between sports and left-handed ～A case of students in Waseda Univ.～

1K05B061

加藤 建人

指導教員

主査 堀野博幸先生

副査 彼末一之先生

I. 研究目的

競技特性上、選手の利き側を左右に分けることができる競技(例えば野球は投げと打ちで左右ある)は多数存在するが、それらの競技において一流と呼ばれる選手には左利きの選手が多い印象がある。そこで 3 つの仮説が生まれた。1.それぞれ競技において左利き又は利き側が左(以下、左利きとする)の選手は一般の左利きの割合(10%)より高いのではないか。2.それぞれの競技において左利きが競技特性上、有利に働くことがあるのではないか。3.競技特性上、左が有利ならば左利きに矯正する人がいるのではないか。そこで本研究では体育部の大学生を対象にアンケートを実施し、明らかにしようとした。本研究においては競技を行う際に使用頻度が高い方の手や足を利き手、利き足とする。例えば、サッカー選手が左足を使う頻度が高ければその人を「左利き」、又は「利き側が左」と呼びまた、バットやスティック、クラブを使用する際は左打ちなら「左利き」、又は「利き側が左」と呼ぶことにする。

II. 対象と方法

単純無作為抽出で選ばれた早稲田大学体育部に所属するア式蹴球部 30 名、庭球部 45 名、スケート部アイスホッケー部門 38 名、フェンシング部 20 名、ソフトボール部 40 名(計 173 名)を対象に留め置き法でアンケート調査を行い、うち有効な回答が得られた 136 名(約 79%) (ア式蹴球部 22、庭球部 36、スケート部アイスホッケー部門 29、フェンシング部 18、ソフトボール部 31)について集計した。

質問項目は種目、学年、競技歴、競技を行う際の利き手(足、側)、試合に出場しているか、左利きは有利と思うか、その理由、利き手(側)矯正の経験の有無、そのきっかけ又は理由、その後の競技パフォーマンスの変化で、自記式の選択式と記述式とした。

処理方法は SPSS を使い、種目(部)ごとの利き側、試合に出場、左利きは有利と思うか、矯正、競技パフォーマンスの変化の度数、割合を求めた。また、左利きは有利と思うかの棒グラフ、左利きが有利、不利な理由についての多重解答のクロス統計表、矯正の理由についての多重解答のクロス集計表を求めた。

III. 結果

サッカーは 22 名中 5 名(約 23%)、テニスは 36 名中 3 名(約 8%)、アイスホッケーは 29 名中 7 名(約 24%)、フェンシングは 18 名中 4 名(約 22%)、ソフトボール(投)は 31 名中 1 名(約 3%)、ソフトボール(打)は 31 名中 11 名が(約 35%)が左利きだった。

左利きは有利と思うかの質問に対して“思う”“どちらかといえば思う”と答えた割合はサッカー、テニスで 8 割以上、フェンシングが約 6 割、ソフトボールが 4 割弱。アイスホッケーにいたっては“思う”が 0 名、“どちらかといえば思う”が 3 名。逆に“どちらかといえば思わない”“思わない”と答えたのは 29 名中 18 名(約 60%)。ソフトボールは“有利と不利な面がある”に 31 名中 16 名(約 52%)となった。

利き手(側)を矯正している選手は 136 名中 17

名いた(両打含む)。内訳はサッカー0名、テニス2名、アイスホッケー1名、フェンシング3名、ソフトボール11名。それぞれの競技で左利きの選手の矯正割合は、テニスは3名中1名(約33%)、フェンシングは4名中3名(75%)、ソフトボール(打)は11名中8名(約73%)であった。

IV. 考察

一般的に左利きの人口は全体の1割と言われているが、アンケートに参加してくれた左利きの選手は全体の約2割となり一般の割合よりも高い結果になった。このことからスポーツ界において左利きは一般の割合より高いと考えられる。

それぞれの競技特性と左利きの優位性の関係を考えたとき、概略すると、サッカー、テニス、フェンシングは左利きの希少性から有利に働くが、アイスホッケーにはスティックの選び方に特徴がある

ため有利に働かない。ソフトボールは打者と投手は有利だが、守備の際ポジションが限定されるなど不利な面もあった。

左利きに有利な競技があるため、利き手(側)を矯正する人がいるのではないかという仮説はテニス1名、フェンシング3名、ソフトボール8名が左利きに矯正していたため、これらの競技においては立証された。サッカーにおいては左利き有利だが競技特性上、矯正という概念がないと考える。

V. 結語

今後の課題として、本研究で調査した競技以外の競技や、小、中、高、大学生、社会人、プロなど競技レベルの違うところで調査し比較することが、このテーマにおける知見を深めるために必要だと感じた。